発表番号　２２　　香川県立香川丸亀養護学校

１　研究主題

児童生徒の自己肯定感・自己有用感を育てる支援の在り方
～愛されること、ほめられること、役に立つこと、必要とされることの「４つの幸せ」をモデルとして～

２　研究の目的

キャリア教育の研究を進めるなかで、知識や技能、職業的態度を身に付けただけでは、キャリア教育の本来の目的である「人生の質の向上」につながらないという課題が明らかになった。キャリア発達とは、人生のその時々に与えられている役割を果たしていく過程であるが、発揮すべき知識や技能などの能力があっても、それをよりよく実現していこうとする内面の育ちが伴っていなければ、力が継続的に発揮されることはない。

学校生活のなかで成功体験を重ねることを基礎に、自己肯定感・自己有用感を育んでいくことが必要だと考え、平成 26 年度から本研究をスタートさせた。

３　研究の具体

①「４つの幸せ」を内面の育ちを関連付けて整理し、学年経営や授業づくりなどでの共通のヒントとした。

児童生徒を
「愛する」こと
「ほめる」こと
→ **自己肯定感**　自分のことが好き！

人の「役に立つ」場面や
「必要とされている」と
感じられる場面を設定すること
→ **自己有用感**　自分はできる！　役立っている！

②自己肯定感や自己有用感が高まると、児童生徒はどのように変容していくのかを「期待する姿」としてまとめ、その姿を目指して研究を進めた。これを、本研究においての評価の基準としても活用した。

自己肯定感・自己有用感が高まると

◎意欲が高まる　◎自主性が生まれる　◎規範意識が高まる

◎人に優しくなる　◎自分の行動に自信がもてるようになる

◎逆境に強くなる　◎人との関わりを充実させ、よりよい人間関係が築ける。

③各校務部と連携しながら、学校全体で児童生徒の内面の育ちを考えた。

例１：**進路指導部**
「進路指導に関する学習指導内容の構造化」の図を改訂。本校での「生きる力」の解釈を整理し、
生きる力　＝　生活する力　＋　働く力　＋　内面の育ち（自己肯定感・自己有用感）　と定義。

例２：**メディア教育部**
自主制作番組「丸の巨人たち」で、児童生徒の優れた才能を発掘し、全校に紹介する取組を継続中。

例３：**保健美化部**
自分と周囲の人の心と体を大切にする「性に関する指導」を、系統立てて行うための体制づくりと推進。

④内面の育ちを軸にした学年経営と授業づくりをするため、毎年、各部でサブテーマを設定して研究を進めた。

・合言葉の設定　・学年経営案の見直し　・「仲間づくり」や「よりよい集団活動」に焦点を当てた研究

⑤「各部や地域とつながるプロジェクト」を実践している。

４　成果

行事や授業を終える度に、児童生徒に「期待する姿」が変容として現れてきている。小学部の児童は、進んで手伝いや係活動に取り組めるようになり、中学部や高等部の生徒は学習や行事で自信をもって意欲的に活動し、諦めずに挑戦しようとすることが増えた。小学部では、特別活動の授業研究をきっかけに、「よりよい集団活動」を意識した学年経営が定着し、６年間の取り組みを体系化したことで内面の確かな育ちの実現につながっている。また、「つながるプロジェクト」を中心に、中学部や高等部の生徒の自己有用感が高まり、その成果は責任感や学習意欲の高まりとして、学習活動や生活態度に現れている。

５　課題と今後の取組の方向

部や地域をつなぐ取組をより発展し充実させるための、時間の確保や教育課程上の位置付けが急務である。

児童生徒が進学後や卒業後に、自分の置かれた環境のなかで、もてる力を継続的に発揮することができるように、引き続き内面の育ちを軸とした取組と授業研究を続ける。